〔東京家政大学研究紀要　第28集，p. 1〜7，1988〕

オーノワ夫人の妖精物語集について

新　倉　朗　子

（昭和62年9月30日受理）

Sur les deux recueils des contes de fées par Mme d'Aulnoy

Akiko NIIKURA

（Reçu le 30 Septembre, 1987）

妖精物語の流行と妖精物語集の位置

17世紀末のフランスに出現した文学ジャンル妖精物語の流行は，1785年から1788年にかけて全41巻の『妖精の部屋』[1]が出版されるにいたるまで，およそ百年にわたって続いた現象である．この間，女性を中心にほぼ40人の作者が，190種ほどの物語を書き残した．その中では，『ペロー童話集』[2]が特に傑出していたので，その他の人びとは，ひとくくりにペローの亜流とされたり，模倣者とみなされたりしてきた．あるいは，ペローが民間伝承の中からすくいとった昔話の素朴な味わいを，宮廷サロン風の恋愛物語に脚色したり，教訓読物の材料としたりして，すっかりだいなしにしてしまったと非難されもした。ところが，ペローが最初の一篇を発表するよりも数年早く，1690年にオーノワ夫人[3]はすでに口承の昔話に発する妖精物語を出版していたのである．*Histoire d'Hypolite, comte de Duglas* と題する物語にはめ込まれた *L'Ile de la Félicité* は，17世紀における文芸化された昔話，すなわち妖精物語の最初の出現であった．

文字にこそ記されなかったが，妖精物語への好みは，大分前から宮廷や貴族の間にも広がっていた．幼少のルイ十四世や，政務の合い間にコルベールが語り聞かせを好んだ逸話を伝える年代記や回想記，遠くへ嫁いだ娘に貴族の生活や社交界の事件を書き送ったセヴィニエ夫人の手紙，などにその証言をみることができる。またこの頃は，青表紙本と呼ばれる行商人が売り歩く粗末な小冊子が広まった時代でもある。中世の物語詩をやさしく書き直した青表紙本の物語は，民衆の間ばかりでなく，貴婦人が料理女に借りてひそかに楽しんだりもしたようだ．1630年代にナポリで出版されたバジーレの『お話の中のお話』も，17世紀のうちに何度も版を重ねており，ナポリ方言こそ読めなくても，よりわかりやすい言葉に置きかえられながら，50話のうちのいくつかが口伝えにフランスまで広まっていた，と推定してもそう無理ではなさそうである．一見，突然出現した如く受けとられがちな妖精物語の流行は，こうした背景の中でいわば起こるべくして起こった現象とみることができるのではなかろうか。

今ではほとんど繙かれることもなくなったこれらのおびただしい妖精物語のうち，ペローとオーノワ夫人の作品のみが子供の本棚の財産として読みつがれ，生き残っている．しかし，子供の本となったとたん，原典に忠実な版が刊行されることはきわめてまれになる．とりわけオーノワ夫人の妖精物語集は，第一集と第二集あわせて8巻あり，出版当初は社交界の人びとを読者として想定していたから，全部で24篇の妖精物語はほとんど枠物語 récit-cadre, frame story としての田園詩風の中篇恋愛小説に組み込まれていた．後世の出版者は，その中から子供に向いた妖精物語だけを抜きとり，それも部分的に，時には短縮したり書き直したりして発行する方法を続けてきた．いわゆる文学史の上からは姿を消しているこの作品が，原典を忠実に復元した注釈つきのテクストとして再版されることは今後もあり得ないと思われる．

一方，児童文学史の流れにおいても，また，17世紀に驚異の物語 Contes merveilleux が人びとの間に生きていたことを知る上でも，オーノワ夫人の作品は見落とすことのできない重要な位置を占めているのである．このことはフランスばかりでなく，イギリスの場合にも当

文学研究室

てはまる。なぜなら，1699年にいち早く英訳されたオーノワ夫人の妖精物語は，次の世紀にはF．ニューベリーによって Mother Bunch's Fairy Tales として広められ，チャップブックの主要作品となって広く流布したのであるから．

本稿では，まず二つの妖精物語集の構成をみることにより，17世紀における妖精物語の受けとられ方を考え，次に，オーノワ夫人の作品がどれほど民間伝承の昔話を材源としているかについて概観することにしたい。

二つの妖精物語集の構成について

二つの物語集はそれぞれ4巻より成り，1697年から98年にかけて計8巻が出版された.『妖精物語』*Les Contes des fées* の1，2，3巻は，1697年の6月以前に出版された記録があるが現存する版はなく，4巻は1698年2月以前に出版されたがこれも現存しない．第二集『妖精物語または当世風の妖精』*Contes nouveaux ou Les Fées à la mode* は1巻と2巻のみが現存[4]し，3巻と4巻は，1698年7月以前に出版されたという記録のみである[5]．8巻揃って再版された現存する最も古い版は1742年版[6]であるが，今回はこれによらず，比較的入手しやすい『妖精の部屋』復刻版[7]によって考察する。復刻版Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ巻の中にオーノワ夫人の妖精物語はすべて収められている．1785年版を復刻したこの『新妖精の部屋』は，目次と内容が一致しないところがあり，二つの物語集の区分はあるが，それぞれの4巻については区分がない．全体の構成を把握する上でも，初版の刊行が2年にわたっているので，材源や影響関係の研究のためにも，8巻の区分けを想定することがまず必要となる．

『妖精物語』1巻と2巻

1巻と2巻は目次との不一致もなく，各種文献に記載があり，その内容は明らかである．ただし献辞の類は一切省かれている．1巻には，Gracieuse et Percinet, La Belle aux cheveux d'or, L'Oiseau bleu, Le Prince Lutin の4話，2巻には次の5話が入っている．La Princesse printanière, La Princesse Rosette, Le Rameau d'or, L'Oranger et l'abeille, La Bonne petite souris

『妖精物語』3巻の内容

3巻以降は趣向ががらりと一変する．当時，「スペインもの」の著者として有名となっていたオーノワ夫人は，読者の期待にあわせてスペイン物語 nouvelle espagnole の枠の中に妖精物語をはさみ込んでいる．この構成は，妖精物語を「ほんのつまらないもの」bagatelle と見，「しゃれた気晴し」位に考えていた作者の意図をよく表わすものと思われるので，繁を厭わず頁数を挙げ，全体の構成の中で枠となるスペイン物語と，挿入された妖精物語とのバランスを明らかにしてみたい．

題名	頁数	備考
	復刻版Ⅲ巻	
Les Contes des fées	376—380	序話
Dom Gabriel Ponce de Léon	381—419	スペイン物語
Le Mouton	420—447	妖精物語(cf)
Ponce de Léon（以下略記）	447—471	目次になく題名もなしで物語の終わった頁の途中から続く
Finette Cendron	472—503	(cf)
Ponce de Léon（題名なし）	504—535	目次になし
Fortunée	復刻版Ⅳ巻 1— 18	(cf)
Ponce de Léon（題名なし）	18— 50	目次になし
Les Contes des fées（題名なし）	50頁の後半部	

ここまでが3巻の内容と考えられる．枠のスペイン物語の間には一つおきに妖精物語3話が組み込まれている．冒頭の「妖精物語」と題する短い一文は，仮りに序話としたが，「ドン・ガブリエル・ポンス・ド・レオン」と題する枠物語も含め，3巻全体を包む大枠としての役割をつとめ，全体としては三重の構造をなしている。大枠の話はこうである．

春の美しい季節に誘われて，気心の知れた良い趣味の友人同志が連れ立って，パリ近郊サン・クルーの森へ散歩に出かける．D×××夫人はほかの人より早く疲れ，泉のほとりで休むことにする．一行のひとり，ド・サン・P氏が「それでは『妖精物語』を置いていきましょう．きっとお楽しみになれるでしょう」と言う．するとD×××夫人は「今になって新しい作品の魅力を，少くともわざわざ人に教えていただく位なら，わたくしがそれを書くべきではなかったのでしょうね」などと答える．それとなく自分が作者であることをほのめかしているのである．オーノワ夫人の作品30点のうち，完全に名前の入っているのは最後の作品[8]だけで，あとは無署名もしくはD×××夫人による，となっていることが思い出される．

一行が戻ると，D×××夫人は若いニンフが現われて歌っ

てくれたので少しも退屈しなかったと話す．de×××侯爵夫人は少々うらやましげに，「あなたと同じ位お話を知っていたら，わたくしも高名な女性になれるのでしょうに」と言う．すると，「それはお宝にはちがいないけれど，それを持っていてもふだんは大事なものの用がたせるわけではありませんし，妖精たちはこれまでわたくしに気前よく便宜をはかってはくれませんでしたから，これからはわたくしもあの人たちのことは放っておくことにします」こうD×××夫人は答える．流行の作家として名が通っていても，晩年は修道院でかなり不如意な暮しを送ったとされる夫人の心境が，宮廷サロン風の気取った会話を通して浮かびあがってくるようだ．「どうかそうおっしゃらずに……きょうほど熱心な聞き手をお持ちになったことはないと思いますわ」と懇願されて，「ちょうどここに読んでさしあげられる，ノートがありますから……より楽しいものにするためにスペインの物語をつけ加えてあります．それは全くの真実で原典からとりましたの」と結んで物語が朗読される．

3巻の巻末では，枠物語が終わると再び語り手のD×××夫人が登場する．一同は森の中の館に用意された食事に案内される．食事の後でノートの残りを是非聞きたいという所望があり，「それでは『バビヨル』の話から始めましょう．その他にもいくつかのお話があり，スペインの物語もありますのできっとお気に召すことでしょう」というD×××夫人の言葉でしめくくられている．この言葉は3巻の終わりを示すものといえよう．

序話は，現在ではめったに読まれることのない部分であるが，17世紀末に妖精物語がどのような場で語られ，楽しまれていたかを示唆している。パリの宮廷やサロンを離れ，郊外の森に遊ぶ貴族や社交界の人びとにとって，妖精物語を聞くのは流行の楽しみなのであった．『妖精物語』の第1巻が王弟妃に，第二集がコンティ内親王に捧げられていることからも，宮廷人を喜ばせるために書かれたものであることは明らかである．

『妖精物語』4巻の内容

Babiole	復刻版Ⅳ巻 頁数 51— 94	妖精物語(cf)
Don Fernand de Tolède	95—106	スペイン物語
Le Nain jaune	107—142	(cf)
Suite de Don Fernand de Tolède	143—162	スペイン物語
Serpentin vert	163—213	(cf)
Don Fernand de Tolède	題名なし 213—228	目次になし

3巻と同様に，「トレドのドン・フェルナンド」と題する枠物語の中に，妖精物語3話が交互に挿入されている．

『新妖精物語または当世風の妖精』1巻の内容

第二集の場合も最初の1巻はすべて妖精物語で，次の3話が入っている．La Princesse Carpillon, La Grenouille bienfaisante, La Biche au bois

2巻，3巻，4巻の内容

2巻以降は，スペイン物語に代わり，「新町人貴族」Le Nouveau Gentilhomme Bourgeois と題する130頁ほどの中篇物語が枠となり，これが6回に分かれて，巻ごとに2話ずつの妖精物語とほとんど交互に編まれている．La Chatte blanche と Belle-Belle ou le Chevalier Fortuné（以下復刻版Ⅴ巻に収録）が2巻に，3巻には Le Pigeon et la Colombe と La Princesse Belle-Etoile et le PrinceChéri，4巻には Le Prince Marcassin と Le Dauphin の2話が収められている．

以上8巻の区分は参考文献等により想定したものである．

枠物語「ポンス・ド・レオン」

枠物語の形式はオーノワ夫人の工夫によるものではなく，ヨーロッパでもすでに『デカメロン』と『エプタメロン』の先例がある．身分のある人びとが田舎に滞在し，つれづれを慰めるために物語を語り合うという状況の設定も同じである．そこで語られたのが口承の民話をとり入れた話である点では，ストラパローラの『愉しい夜々』やバジーレの『お話の中のお話』が先例としてある．ただし，この時代の枠物語形式においては，18世紀に翻訳された『千一夜物語』に比べると，枠とそこに組み込まれた物語との間に緊密なつながりのないのが特徴といえる。

第一集の「ドン・ガブリエル・ポンス・ド・レオン」の場合を例にとってみよう。

急な病いで母親が亡くなったあと，美しい二人の娘が社交界に出るまでの間，田舎の館で厳しい老嬢の伯母の後見のもとに置かれる．ブラインドを深く下ろし，世間と交渉を断って暮しているその館へ，美しい娘の噂を聞

いて，娘たちの兄の友人である二人の若い貴族が身をやつしてやってくる．盗族に襲われて怪我をしたといつわり，一夜の宿を求め，音楽教師と称してまんまと住み込む．伯母のドナ・ジュアナは滑稽な役回りで，何よりも妖精物語（romances, romances de fées, contes de fées などの呼び名を同等に使っている）が大好き，4歳の童女のように聞かせてくれとせがむかと思うと，貴族の一人に恋をして，世間体があるからメキシコへ行って暮そうなどと迫まる．若い男女の二人組は，思う人に思われず，思わぬ人から思われるという悲喜劇におち入るが，最後はめでたしとなる．

田舎の館に身分あり才気ある人たちが運命のめぐり合わせで孤立して暮し，物語を語り合うという場の設定も，登場人物も，従来の枠物語の定石通りである．この枠物語がいまわれわれの興味をひくのは，これが妖精物語の理解に光を投げかけてくれるからにほかならない．「フィネット・サンドロン」が語られる前に，3人の登場人物の口を通して妖精物語に対する作者の考えが伝えられている．この部分は資料としても価値があると思われるのでなるべくそのまま引用しておこう[9]．

ドナ・ジュアナ：「わたしはこの話をアラブの老奴隷女から聞き覚えました．彼女は近東中で最も高名な老ロクマンの寓話をどっさり知っていました。ロクマンをイソップのことだと思っている人もいるようですが，妖精物語（ロマンス）の素朴で単純な味わいは，誰にでも好まれるわけではありません．多くの才気ある人びとは，そうした物語は繊細な人よりはむしろ乳母や家庭教師に向いていると考えています．でもわたしは，この単純さの中にこそ芸術があると思わずにはいられません．大層良い趣味のお方が，とっておきの楽しみとして時にこれを味わっておいでなのを存じていますもの」

ポンス・ド・レオンの友人の伯爵の意見：「少しも驚くにはたりませんな．人は変化の中に楽しみを見出すものですから．妖精物語だけを読んだり語ったりしたがる人は滑稽ですし，それを非常にまじめなものと言いたてたりしては判断力に欠けることになりましょう。いつも誇張したり大げさな文体で書いたり語ったりしたがる人は，妖精物語に固有の性質を奪うことになりかねません．でも，重大な仕事のあとでは気晴しになるでしょうよ」

こうしたやりとりのあと，娘の一人メラニーが，「多少は教訓も必要ですし，何より肝心なのは取るにたらないものとして提供すべきであって，その値打ちを決めるのは聞き手に任せなくてはいけません」と言う。ドナ・ジュアナは語り始めるにあたり，「これからお話するのは，最も単純なロマンスの一つです．けれども，妖精物語をつくる人たちは，もしその気になればもっと重要なこともできる人たちであることだけは申しあげておかなくてはなりません」とつけ加える．

これらの言葉には，オーノワ夫人の自負と，他の作者への批判が表われており，単純・素朴な味わいが妖精物語に固有の特徴であるという言葉から，昔話を直接的な材源としていることが推測できる。

オーノワ夫人の妖精物語と材源となった昔話

結婚生活の失敗と自ら撒いた種[10]により，修道院での幽閉生活や外国暮しを送らざるをえなかったオーノワ夫人は，その不運にめげず，文筆によって己の存在を主張しようとしたかにみえる．1690年に第一作を発表後，13年の間に約30点の作品を刊行した．第一作と同じ年に，*Mémoire de la Cour de l'Espagne* を発表，翌年には *La Relation du voyage d'Espagne* を出版，大好評を博した．以後の著書には，「スペイン旅行記と回想記の著者による」という表示がしばしばみられるほどである．この二作の評判が高かったので，それに便乗して書かれた贋作も現われ，書誌にもいまだに混乱がみられる[11]．『スペイン回想記』には，中世の『トルヴァドゥール評伝』にもみられる「心臓を食う話」があり，『スペイン旅行記』は，メリュジーヌ伝説[12]にもとづくMira と題する物語を含み，いずれも昔話のモティーフが材源として使われているので妖精物語集との関連上見逃せないが，この二作については別の機会に検討することにしたい．

『旅行記』と『回想記』を除くと，オーノワ夫人の妖精物語は，*Histoire d'Hypolite, Comte de Duglas* に組み込まれた *L'Ile de la Félicité* の1話と，二つの妖精物語集に収められた24話の，合わせて25話となる．25話のうち昔話の話型 Conte type（CT と略記）と対応するものは16話あり，そのうち3話は話型のタイトルとして採用されるほどよく知られた話である．次に，『フランス昔話型目録』[13]によって16話を話型の番号順に整理してみよう。

昔話話型対照表

話型番号 〔話型タイトル〕	原　　題 「邦訳名」または(仮訳名)	復刻版 収録巻数	備　　考
CT313 〔悪魔の娘〕	L'Oranger et l'abeille （オレンジの木と蜜蜂）	NCFⅢ	いったん口承の流れに入ったのち，簡素化された形で『グリム童話集』初版の1812年版に70番 Der Okerlo（人食い）として収録された．
CT327C（参照） 〔袋に入った子供〕	Le Pigeon et la Colombe （鳩になった王子と王女）	NCFⅤ	
CT402＋310 〔白猫〕 CT310〔ペルシネット〕	La Chatte blanche 「白猫」	NCFⅣ	19世紀中に何度も行商本に印刷され，口承の昔話に影響をあたえた．ペルシネットはパセリ娘を意味し，グリムの「ラプンツェル」と同型話．ヒロインの身の上話の部分が相当する．
CT403A 〔すりかえられた許婚者〕	La Princesse Rosette 「ロゼット姫」	NCFⅢ	結末のエピソードでヒロインを助ける犬が活躍する話型300のモティーフが入っている．
CT403A＋B 〔同上〕	La Biche au bois 「嘆きの牝鹿」	NCFⅣ	
CT425A（参照） 〔消えた夫の探索〕	Gracieuse et Percinet 「グラシウズとペルシネ」	NCFⅢ	
CT425A（参照） 〔同上〕	Le Serpentin vert 「緑色の蛇」	NCFⅣ	
CT425C(参照)＋725＋923 〔同上〕CT725〔夢〕 CT923〔塩のように愛される〕	Le Mouton （羊王子）	NCFⅢ	ルプランス・ド・ボーモン夫人の「美女と野獣」に受けつがれた話である．
CT432 〔青い鳥〕	L'Oiseau bleu 「青い鳥」	NCFⅢ	12世紀のマリ・ド・フランスの短詩『レ』に「ヨネック」と題する同じテーマの作品がある．
CT433B 〔蛇王子〕	Le Prince marcassin （猪王子）	NCFⅤ	ストラパローラの『愉しい夜々』第２夜第１話の再話とされる．
CT470B 〔誰も死なない国〕	L'Ile de le Félicité （フェリシテの島）		第１作『デュグラ伯爵，イポリットの物語』に組み込まれている話．
CT510A＋327A＋B 〔サンドリヨン〕	Finette Cendron 「フィネット・サンドロン」	NCFⅢ	CT327A＋B〔親指小僧または森に捨てられた子供〕話の発端の部分がこの話型に相当する．
CT513＋884A 〔陸でも海でも進む船〕	Belle-Belle ou le Chevalier Fortuné （ベル＝ベルまたは騎士フォルチュネ）	NCFⅤ	CT884A〔男装の娘が王妃に恋される〕
CT531 〔金髪の美女〕	La Belle aux cheveux d'or 「金髪の美女」	NCFⅢ	
CT675 〔怠け者〕	Le Dauphin （いるか）	NCFⅤ	ストラパローラ『愉しい夜々』第３夜第１話の再話とされる．
CT707 〔真実を告げる鳥〕	La Princesse Belle-Etoile et le Prince Chéri（美しい星の王女とシェリ王子）	NCFⅤ	

以上16話に認められる話型について，今回は概観するに留めざるをえないが，残る9話についても，R．ロベールのいうように[14]果してフォークロアと無関係で純粋な創作だと言い切れるかどうか疑問である．話型が同定されなくても，エピソードやモティーフのレベルでは昔話の要素が多分に認められるように思うが，一つ一つの物語についての詳細な検討は，稿を改めてのこととしたい．

オーノワ夫人自身が，繰り返し「取るにたりない」ものといい，「アラブの年老いた奴隷女から聞いた」話などといいつくろっていることは，それが身分の低い人びとの楽しみであったからで，とりも直さず，民間に生きていた真正なフォークロアに材を得ていることを証言していることになる．材源に関する作者自らの証言はしばしば当てにならない場合が多いが，ブルターニュのフォークロア収集研究の第一人者ポール・セビヨによれば，オーノワ夫人の作品のあちこちにみられる非常に多くの昔話的特徴は，オート・ブルターニュの昔話に共通しているという．そして，オート・ブルターニュに隣接し，さまざまな面で共通点を多く持つバス・ノルマンディーで育った夫人は，子供の頃に接した農民から聞いた昔話を記憶していて，そのいくつかを断片的にせよ用いたのではないかと推測している[15]．

後世は同時代の評価を逆転させ，いまは旅行記や回想記の作者ではなく，妖精物語の作者としてオーノワ夫人は名をとどめている．豊かな空想にまかせて脚色し枝葉を拡げて長々とふくらませた物語が，歳月に耐えていまもなお生き残っているのは，そこに脈打つ昔話の魅力だと思われてならない．「青い鳥」のように，フランスの口承話がすべて夫人の作品から発している例もあれば，「フェリシテ島」のように，スエーデンの民衆本に入り，そこからロマン派の同名の作品が生じた例もある[16]．17世紀末に息づいていた民間伝承を，文芸化された形にせよ書き残すことにより，作者が予期もしなかった波及効果をもたらすことになったのである．

付表―書誌における誤記について

最新の文学辞典にも，専門的な書誌においても，半世紀前の研究で明らかにされている結果が反映されず，オーノワ夫人に関する書誌にはしばしば混乱がみられるのが現状である．特に，*Les Illustres Fées* は妖精物語集であるだけに混同されやすい．次に，誤ってオーノワ夫人の著書とされている作品とその記載のある文献(〔　〕で示す）の一覧を掲げる．

1. *Nouvelles d'Elisabeth Reyne d'Angleterre,* Paris, 1674, 1679
   〔*Bibliographie de la littérature française du XVIIe siecle,* par Alexandre Cioranescu, éd. du CNRS, 1969, 以下AC17世紀書誌と略記する〕
2. *Mémoires des Aventures Singulières de la Cour de France,* par l'auteur du Voyage et Mémoires d'Espagne, La Haye, 1692〔AC17世紀書誌〕ただし，Roche-Mazon はオーノワ夫人作としている．参考文献2．p11参照（論文の初出は1927）
3. *Mémoires secrets de Mr L. D. D. O. ou les aventures comiques de plusieurs grands princes de la Cour de France,* par Mme d'Aulnoy, auteur de Mémoires et Voyage d'Espagne, Paris, 1696〔AC17世紀書誌〕
4. Chavalier de Mailly : *Les Illustres Fées,* Paris, 1698
   〔J. P. Beaumarchais, D. Couty, A. Rey:*Dictionnaire des littératures de langue française,* Bordas, Paris, 1984〕,〔AC17世紀書誌〕,〔Laffont-Bompiani : *Dictionnaire des œuvres de tous les temps et de tous les pays,* Paris, 1962〕
5. *Histoire et les aventures de Kermiski Géorgienne,* par Mme D^×××, Bruxelles, 1697〔AC17世紀書誌〕

謝　辞

本稿は，東京家政大学昭和60年度特別研究費の助成による，フランス児童文学史研究の一部をなすものであることをここに記し，深甚なる謝意を表したい。

注

1）*Le Cabinet des fées, ou Collection choisie des contes des fées, et autres contes merveilleux,* Amsterdam, 1785〜1786, Genève 1788

2）*Histoires ou contes du temps passé avec*

des moralités, Paris, 1697

3) ドーノワ夫人とも表記される．17世紀の文献には，Daunoi, Daulnoy と綴られている例もあり，D$^{\times\times\times}$夫人とする例もあるので，ドーノワに統一すべきかもしれない．ただ，文学辞典や書誌等はすべてAの項目に入っており，決め手がみつかるまでオーノワとしておく．Marie-Catherine Le Jumel de Barneville, baronne d'Aulnoy 1650または1651バルヌヴィルに生まれ1705パリに死す．comtesse としている文献も多いが，結婚した相手は baron d'Aulnoy であり，爵位に関してそれ以上のことはわかっていない．

4) *Contes nouveaux ou Les Fées à la mode,* par Mme D., Paris, Veuve de Théodore Girard, 1698

5) 参考文献1，2，4による．

6) *Les Contes de fées* par Mme D., Nouvelle édition, Paris, Compagnie des libraires, 1742

7) *Nouveau cabinet des fées,* Slatkine Reprints, 1978

8) *Le Comte de Warwick,* par Mme Daulnoy, Paris, 1703

9) *Nouveau cabinet des fées,* tome Ⅲ, p.470—471

10) 今回は触れなかったが，彼女の結婚生活はまことにドラマチックなもので，その生涯についての予備知識は作品理解に欠かせない．大方の評者は，15歳で30年上の男性と結婚し，4人目の子を宿しながら母親と計って不敬罪をでっち上げ，夫に罪をきせようとした悪女として描いている．それに比べ，同性愛のコネを使って成り上がり，役職を利用して小金を貯め，汚職までしていた忌むべき夫像を浮き彫りにし，裁判の模様を詳しく書いている Roche-Mazon の論文は，離婚が許されなかった時代背景をあわせ考えると大変興味深い．

11) 付表参照

12) 拙稿「フランスの妖精たち—ブルターニュを中心として」，民話の手帖，1986，27号 pp.49—59 参照

13) P. Delarue et M.-L. Teneze : *Le Conte populaire français* tome Ⅰ, 1976, tome Ⅱ, 1964

14) 参考文献4 p.92

15) Paul Sébillot : Contes de la Haute-Bretagne qui présentent des ressemblances avec des contes imprimés, in *Revue des Traditions populaires,* 1894, Ⅸ p.98

16) Laffont-Bompiani : *Dictionnaire des œuvres* による．

参考文献

1. Mary Elizabeth Storer : *La Mode des Contes des fées——un épisode littéraire de la fin du XVIIe siècle,* 1928, réimpression de l'édition de Paris, 1972
2. Jeanne Roche-Mazon : *Autour des Contes de fées,* Didier, Paris, 1968 (Etudes de littérature étrangère et comparée N°55)
3. Jacqnes Barchilon : *Le Conte merveilleux français de 1690 a 1790. Cent ans de féerie et de poésie ignorées de l'histoire littéraire,* 1975, 再版は *Nouveau Cabinet des Fées* tome Ⅰ, 1978
4. Raymonde Robert : *Le Conte de fées littéraire en France de la fin du XVIIe à la fin du XVIIIe siècle,* 1982